公開シンポジウム＜実演付き＞

海外で鳴り響いた邦楽

時は、明治、大正、昭和初期・・・西洋音楽が街に響き始めた頃。その響きと同様、いや、それ以上に人々の耳に自然に入り込んでいた「**邦楽**」。世界に名を馳せつつあった東京・大阪などの近代都市以外でも**ソウル、大連、上海、台北など**の諸都市で、その音風景（サウンドスケープ）が鮮明に描かれていたのです。

大連には能楽堂、各地に公会堂や劇場などが創建され、何百人もの人がそこに集っていました。そしてそこに住まう多くの人々が自ら演奏し、また、プロの公演に酔いしれていたのです。その様子を追ってみると、いま、私たちが海外にすまう異邦人や邦人に、「邦楽」の魅力を伝えるヒントがあるように思われます。

当時の実演の様子を垣間見つつ、人々の熱い思いを追体験してみませんか？

日　時：2012年9月17日（月・祝）　12:30－16:30　※正午開場

会　場：大江能楽堂　京都市中京区押小路通柳馬場東入

地下鉄東西線「京都市役所前」西へ徒歩５分　または 地下鉄烏丸線「烏丸御池」東へ徒歩５分

会場 URL：http://www.asahi-net.or.jp/~tn4m-ooe/

内　容：２０世紀初頭の満洲・台湾・東京の邦楽界について

基調報告／海外上演の復元（能・長唄）／シンポジウム

料　金：入場無料

主　催：外地の邦楽プロジェクト

協　力：財）杵勝会　／　大江能楽堂　／　株）宝　大　／　満次郎の会

助　成：公益財団法人トヨタ財団

本シンポジウムに関するお問合せ先

電　話：０３－３６５５－３２４１（満次郎の会）平日９時～18時

メール：gaichi-hougaku@mail.goo.ne.jp

（大連でのお稽古の様子：泉家所蔵）

（大連能楽殿での《岩船》：住駒家所蔵）

＜本チラシ掲載写真などの無断転載は固くお断りいたします＞

＜基調報告＞

20 世紀初め、海外では日本の音楽にどのようなまなざしがむけられ、海外にすまう人はどのような音楽を視聴していたのでしょうか。またどのように、どのような場所でまなんだのでしょうか。東京や大阪などからはどのようなプロのパフォーマーが訪れ、どこで上演したのでしょうか。そして海外の都市にはどのような娯楽環境がしつらえられていたのでしょうか。

21 世紀の今、海外の人は、日本の音楽に関心をもっておられるでしょうか。我々が、どのように伝え、そして感じ、理解してもらうことができるのでしょうか。

体験された方の言葉や文献史料をもとに、その様相を探り、そして未来にむけて「邦楽」を伝えていくにはどのようにしていくかを考えてみました。

報告者：仲　万美子（同志社女子大学教授）　／　塚原　康子　（東京芸術大学教授）
劉　麟玉　（奈良教育大学准教授）　／　辰巳　満次郎　（能楽師　文化庁文化交流使）

＜実演＞

海外ではどのようなスタイルで上演されていたのでしょうか。
満洲で行われた能と台湾で奏された長唄を、資料にもとづき再現してみたらどうなるでしょうか。

実演曲／実演者

能（素能）　《高砂》シテ：辰巳満次郎ほか
《猩々》シテ：中嶋　謙昌ほか
長唄《都鳥》《夜の雨》唄：日吉栄寿（星野厚子）
三味線：杵屋勝三弥　杵屋勝十朗

（大連劇場：『大連名称絵葉書 DAIREN』）

（基隆公会堂：1921 年福原書店発行絵葉書）

＜本チラシ掲載写真などの無断転載は固くお断りいたします＞

本シンポジウムは、公益財団法人トヨタ財団 2010 年研究助成プログラム（研究課題「植民地時代の旧満州地域および台湾の日本伝統音楽・芸能の普及の実態とその意義 ― 上海租界地域および日本国内との比較考察を通して―」、仲万美子・高桑いづみ・塚原康子・劉麟玉・辰巳満次郎・中嶋謙昌・星野厚子）の研究成果の一部を公開するものです。